

2. 日本語について知る

1. 日本語母語話者の多くは日本語文法を知らない！？

現代日本語文法は、たとえば英文法やロシア語文法のように、必ずしも、普遍的、体系的なものとして、きちっとしたかたちで確立しているとは言えません。高等学校までの、とくに中学校の国語科において教えられている「国文法」は、英文法などの欧米の言語の文法をもとにして作られたもので、英語などのヨーロッパの言語と構造が著しく異なる言語である日本語の文法的な特徴を十分に説明できるものではありません。しかし、日本語母語話者は、もともと文法的知識があらうとなかろうと、日本語を自由に話してきたので、学校で教えられる文法が日本語の特徴をわかりやすく説明できないものであったとしてもとくに問題にはなりません。ところが、第二次世界大戦後しばらくしてから、おそらく 1970 年代以降、日本に多くの外国人留学生や外国人労働者とその家族がやってくるようになって、彼らに日本語を教えるための日本語学校や日本語教室があちこちにでき、また大学では外国人留学生のための日本語の授業が開講されるようになりました。それらの日本語教育の実践の場で、日本語教師たちの多くが、外国人に日本語を教えるときに自分たちが中学や高等学校で教えられてきた文法の知識では、日本語の文法的な特徴を外国人たちにうまく説明できないことに気づき始めました。日本語母語話者は、本当の日本語文法を実は知らないのです。

2. 日本語の発音

日本では、小学校の国語の授業で「ひらがな」「カタカナ」を五十音図というもので学びます。そのことを通じて日本語母語話者は日本語には 50 の音があるのだと思っています。しかし、よく考えると、「ガ」「ギ」「グ」などの濁音、「パ」「ピ」「プ」などの半濁音、「キャ」「キュ」「キョ」などの拗音があることに気づき、いったいいくつの音があるのだろうと、わからなくなってしまいます。また、「キェ」「ミェ」などは、日本語の標準語（東京方言）には存在しない音素ですが、外来語や日本語の方言の表記のために用いられており、日本語の標準語にはいくつの音素があるのか、あいまいです。

他方、外国人にとって、日本語はどのように聞こえているのでしょうか。その一つの手がかりは、日本語のローマ字表記です。日本語のローマ字表記は、アメリカ人宣教師のジェームス カーティス ヘボン（James Curtis Hepburn, 1815 年 3 月 13 日～1911 年 9 月 21 日）が和英辞典『和英語林集成』をつくるために考え出したものが最初のもと言われています。その表記を「ヘボン式」と言います。ヘボンは米国人ですから、日本語の「ヘボン式」ローマ字表記は、英語話者の立場から考え出されたものと言ってよいでしょう。「ヘボン式」表記では、たとえば、「サ行」は〈s〉と〈sh〉という 2 つの子音が、「タ行」は〈t〉〈ch〉〈ts〉という 3 つの子音が、「ハ行」は〈h〉と〈f〉という 2 つの子音が混ざっています。つまり、ヘボンは、日本語の「サ行」音から 2 種類の子音を、「タ行」音から 3 つの子音を、「ハ行」音から 2 つの子音を聞き分けていたことがわかります。これらのことは、日本語を「ヘボン式」でローマ字表記することが多いので、多くの日本語母語話者が気づいています。

しかし、「ん」に〈n〉と〈m〉の 2 通りの子音があてられていることは、あまり知られていません。日本語母語話者の多くは、「ん」の音はひとつしかないと思っているのですが、ヘボンは「ん」の 2 種類の子音を聞き分けていたわけです。しかも、これは表記の問題ではなく、発音の問題なので、やっかいです。たとえば、「本（ほん）」という言葉の「ん」をヘボン式で表記する場合、「本棚（ほんだな）」のときには〈hondana〉となって〈n〉と表記するのですが、「本箱（ほんばこ）」のときには〈hombako〉となって〈m〉と表記します。つまり、ヘボンには、「本（ほん）」という日本語は、「本棚」と言うときと「本箱」と言うときで「ん」の音に違いがあると感じられたのです。確かに違うようです。ウソだと思ふなら、「本棚」と言うつもりで「本」で止めたときと、「本箱」と言うつもりで「本」で止めたときの唇のかたがどうなっているか確かめてみてください。「本棚」の場合は上唇と下唇が離れているのに対して、「本箱」の場合はくっついてますね。ヘボン式では、撥音（ン）は〈n〉で表しますが、次に続く子音が〈b〉〈m〉〈p〉のとき、〈m〉と表記するのです。

しかし、以上のことは、日本語話者にとって、これは発音の問題と言うより、表記の問題のようにも思えます。こうして、日本語話者にとって、日本語は、どの程度まで表記通りに、あるいは綴り通りに発音する言語なのかどうかということが気になってきます。この、日本語は表記通りに発音されているのかどうかということは、日本語母語話者には、気づきにくいことだと思われそうですが、注意深く聞いていると、日本語は必ずしもすべて表記通り、あるいは綴り通りに発音されていない言語であること、つまり同じ綴りでも同じように発音されないことがある言語であるということに気づきます。

たとえば、母音の〈i〉〈u〉は、無声子音〈k〉〈ky〉〈s〉〈sh〉〈t〉〈ch〉〈h〉〈f〉〈hy〉〈p〉〈py〉に挟まれたとき、文末にあるとき、無声化または脱落しているように聞こえます。とくに〈u〉は無声化というより脱落しているように聞こえます。たとえば、「薬（くすり）」は〈kusuri〉ではなく〈ksuri〉と、「ネクタイ」は〈nekutai〉ではなく〈nektai〉と、「7 時（しちじ）」は〈shichiji〉ではなく〈shchiji〉と、「～です。」は〈desu〉ではなく〈des〉と発音されているように聞こえます。こうした発音を外国人は聞き取りにくいと感じるようです。ちなみに、この現象は、関西方言には起きないので、アクセントや語彙の違い以外で、関西出身者を容易に見いだすことができます。

3. 日本語文法の一端

3.1. 「ている」

日本語に頻出する「～ている」という表現は、英文法なれしている（ここにも出てきました）、すぐに現在進行形だと思いがちですが、「車が止まっている」とか、「父はもう家に帰っている」というのが現在進行形でないのは明白です。「車が走っている」は現在進行形のようなので、「～ている」という表現が現在進行形を示すことがあるのは事実ですが、「止まっている」というのは、どう考えても「止まりつつある」という意味ではなく、車の止まった状態が持続していることを示しています。状態を示すと言

ってもいいでしょう。「父はもう家に帰っている」も、やはり状態を示しているようです。「窓が開いている」も同様です。進行形か、状態の持続かの違いは、動詞の性質によります。つまり、日本語の動詞には、「～ている」が進行形を示す継続動詞というグループ、すなわち「歌っている、書いている、読んでいる、降っている」というような動詞のグループと、瞬間のうちに事態が推移するために進行形になりえず、その動作の結果の状態の持続を示す瞬間動詞というグループ、すなわち「消えている、ついている、倒れている、とれている」というような動詞のグループがあると考えられています。

3.2. 「連体詞」と「形容動詞」

国文法は、〈小さな〉〈大きな〉〈わが〉〈この〉〈その〉〈あの〉〈どの〉などを連体詞としていますが、〈小さな〉〈大きな〉は形容詞連体形の特徴的な変化形と思われますし、〈わが〉は「わたし」あるいは「われわれ」を意味する古語の代名詞「わ」に、同様に古語の連体修飾語を示す格助詞「が」がついたもの、〈この〉〈その〉〈あの〉〈どの〉は、古語の指示代名詞「こ」「そ」「あ」「ど」に連体修飾語を示す格助詞「の」がついたものであり、「代名詞＋格助詞」としてさらに品詞分解ができますから、連体詞という品詞を立てること自体に疑問があります。また、「静かだ」などの形容動詞も、「美しい」などの形容詞とは別の変化形を持つ形容詞と考えたほうがわかりやすいかも知れません。

3.3. 「は」と「が」

「私は上野です」と「私が上野です」は同じ意味でしょうか。もし同じ意味であるならば、なぜ2通りの言い方があるのでしょうか。よく考えてみると、やはり違いがあるようです。なぜなら、こういうシチュエーションでは「私が」を使えない、使うと変な感じがするシチュエーションがあるからです。たとえば、話し手は、聞き手がその話し手と初めて会って、話し手についてまだ何も知らないかと予想されるとき、つまり初対面するとき、「私は〇〇です」と自分の姓を名乗るようです。他方、聞き手のあいだに自分について何らかの情報が事前に流されていて、たとえば、「今度、うちの学校に上野という名前の新任の先生が着任したらしいけど、どんな先生なんだろう？」といったような噂が流れていることがあらかじめわかっているとき、「私が（その噂の）上野です」と名乗ることがあるようです。つまり、「は」と「が」の使い分けは、既知情報の有無と関係があることがわかっています。

実は、この問題は、外国語の翻訳のときに、重要な問題となります。英語の定冠詞〈the〉は、この「は」と「が」の違いに関係する、既知情報の有無と、やはり関係しているからです。既知情報があるときには〈the〉を使うというのが、〈the〉の用法のひとつです。ということは、変な英語ですが、〈This is the pen.〉は、「これはそのペンだ」ではなく、「これがそのペンだ」と訳したほうが、いい訳なのかもしれません（このペンは、彼が彼女から誕生日のプレゼントにもらった、噂の高級ブランドのペンなのです）。

そんな「は」と「が」が、一緒に登場する文が日本語には頻出します。「象は鼻が長い」、「僕は彼女が好きだ」、「私はコーヒーが飲みたい」、「今日は天気がよい」、「東京は人が多い」。これらの日本語を、英語やロシア語ではなんと言うかを考えると、英語やロシア語では、主語は、日本語の「は」の前の単語である場合もあるし、そうでない場合もあることに気づきます。英語では、不思議なことに、「今日は天気がよい」を言おうとすると、〈It's fine day today.〉となり、〈it〉という、日本語には存在しない単語を主語にしたりさえします。英語は、とにかく主語がなければならない、言ってみれば主語がメインの言語ですが、他方で、ロシア語は〈Сегодня хорошая погода.〉と言い、сегодня は英語の today と同様に副詞ですので、主語がなくても構わない言語だということに気づきます。つまり、ロシア語や日本語は、述語が重要な言語だと考えられます。

外国語を日本語に翻訳するときは、この日本語の日本語らしい特徴を活かすことが必要であり、逆にそのことに無頓着だと一見したところ日本語に見えるけれど、日本語ではそんな言い方はしない「日本語もどき」の悪訳ができます。たとえば、1960年代に活躍した The Beatles という英国のロックバンドの曲に〈And I love her〉というのがありますが、「恋に落ちたら」という邦題はともかく、歌詞の訳として、「そして私は彼女を愛する」というのがありますが、これは自然な日本語ではありません。歌詞の中では「だからあの子が好きなんだ」、曲名は「あの子が好き」といった訳が、日本語としては自然な訳でしょう。

この「好き」は、ロシア語では〈любить〉または〈нравиться〉という動詞を使って表現することが多いでしょう。たとえば、「私はあなた（のこ）が好き（です）／僕は君（のこ）が好き（です／だ）」はロシア語では〈Я люблю тебя.〉ですし、「私はモスクワが好きです」は〈Мне нравится Москва.〉です。英語ならどちらも〈love〉または〈like〉を使って、〈I love (like) you (Moscow).〉ですね。日本語は、「は」と「が」が同時に使われています（この文も「は」と「が」が同時に使われています）。日本語は、「は」と「が」を多用し、その使い分けが重要だと言うことがわかります。他方、ロシア語は、モスクワについては、直訳すると「モスクワは私に気に入られている」となっていて、私が好きな対象であるモスクワが、また英語なら〈love〉や〈like〉の目的語になるはずのモスクワが、逆に主語になっています。

ところで、「は」と「が」が、同時に出てくる日本語の代表例として、「象は鼻が長い。」という文を示しましたが、これを英語やロシア語で何と言うかを考えてみるのも興味深いものがあります。英語では〈Elephant has a long nose.〉、ロシア語だと〈У слона длинный нос.〉と言うことが多いでしょう。つまり、英語は動詞〈have〉を使って「象は長い鼻を持っている」と言っていますが、ロシア語は場所を示す前置詞〈y〉を使って「象のところには長い鼻がある」と言っています。ここにも、それぞれの言語の違いが現れていて、興味深いですね。

【読書案内】 軽い読み物を中心に

金谷武洋『日本語文法の謎を解く－「ある」日本語と「する」英語』筑摩新書、2003

佐々木瑞枝『外国語としての日本語』講談社現代新書、1994

田中章夫『日本語スケッチ帳』岩波新書、2014

中村桃子『女ことばと日本語』岩波新書、2012

森田良行『日本人の発想、日本語の表現』中公新書、1998

柳瀬尚紀『日本語は天才である』新潮文庫、2007